

談志まつり 「……のようなもの」

三 春

生前の談志は自分の会をすっぱかしたり会場の客と喧嘩したりの荒っぽい人だった。十一月二十一日は彼の命日で、直弟子たちが一堂に会して「談志まつり」なるものを催す。二年ぶりの追善落語会に「よみうりホール」の千百席は埋めつくされた。昼夜あわせた売上は一千万円に上るだろう。

我々落研OB有志は、立川ぜん馬師匠と高校で同窓

だったTさんのコネで昼席の一階中央十列目を確保。OBペンクラブの新春落語会にもお招きしたぜん馬さんは名人の誉れ高い噺家だが幾多のガンに阻まれ、今回もどこかのガンを退治して復帰したばかりだ。落語会は売れ筋の人気者を入り前後やトリに配置するのが普通だが、この会では人気に関係なく入門歴の長さで順番が決まる。

私は志の輔の噺を楽しむに、落語会にしては高い四千五百円を奮発した。この日のネタは「パールのようなもの」。SFやパロディもので知られる清水義範の同名小説を元に志の輔が創作した噺である。おおよそはこんな感じ。

——ねえご隠居！ ニュースでよく聞く『パールのようなもの』ってのは何だい？
パールでこじ開けたでいいじゃねえか

——誰も見てないから『パールのようなもの』と言ってるんだ

——そうか、『女のような』は女じゃない、『夢のような』は夢じゃない、『ハワイのような』はハワイじゃないんだ

納得した八つつあんが家に帰るとカミさんが血相変えて怒っている。

——あんた女のところに行ってきたね。妾のところだ！

八つつあんが弁解してもカミさんは全く取り合ってくれず、「妾の所に行ってたんだ」「いや行っていない」の押し問答。

これじゃキリがないと八つつあんは「あれは妾じゃない、『妾のようなもの』だ」と言い放ち、カミさんにぶん殴られてしまう。

翌日のTさんメール「志の輔さすがだね。ところで私にも『愛人のようなもの』が一人おります」

私「志の輔は郷里の富山の会では越中語の噺をやるそうで聴いてみたいねえ。ところで、その『愛人のようなもの』が貴方を『ダンナのようなもの』と思ってるかどうか……、まあ、んなことあどうでもいいやね〜」

Tさん「はい、どうでもいいです」

